

シリーズ 教室探訪コーナー

鷺郷吟詩会・八坂支部

8月20日（月）18時、福島区海老江にある八坂神社社務所の2階で行われているという八坂教室を訪ねてきました。今回は我が広報部所属の長谷川部員が訪問教室のメンバーということで、広報部全員が参加、やはり、長谷川広報部員の根回しの良さに感服いたしております。



現在、大橋鷺迅会長率いる鷺郷吟詩会は設立時期こそ不明とされていますが、昭和15年頃には既に活動をしていたという記録が残っているというから大変驚きです。そんな歴史ある鷺郷吟詩会・八坂支部の教室は、現在十数名で運営されており、この日は大橋鷺迅会長、岩間鶴声講師他10名の会員さん（1名欠席）が集まっておられました。



ほとんどが男性で女性は2名でしたが、活気があり明るい雰囲気の中、岩間講師の発声練習からお稽古が始まりました。腹の底から響き渡る迫力のある声に圧倒されました。しかし、会

員の方々は慣れたもので、水1本から5本までを先生に負けじと大きな声を出しておられました。

本日の講習は「後夜仏法僧鳥を聞く」です。講師が素読をし、会員さん達が感情を込めしっかりと素読を繰り返されました。そして大橋会長が作者、空海についてわかり易く説明をされました。遣唐使として唐に渡り帰国後、真言宗を広められ、空海は嵯峨天皇、橘逸勢と共に日本三筆と称されている事などをお話しされ、いよいよ岩間講師の吟詠指導の始まりです。うわぁ～なんという響きのある吟声なのでしょう。聞き入りながら私なら途中できっと倒れるだろうなぁと感じていました。

さて、ここからは一人ずつの吟詠です。まずは、長谷川さんが詠われました。初めて吟を聞かせて頂きましたが落ち着いてとてもいい感じでした。全員が独吟をし終わったので、今日は広報部の方々が見えているので少し早く終わりましたと、そして、食事会、楽しく美味しく温かく親交を深めさせていただきました。大橋鷺迅会長はじめ会員の皆様、大変お世話になり有難うございました。

現在の鷺郷吟詩会支部並びに支部講師

会長 大橋鷺迅

八坂支部・講師 岩間鶴声

浄正支部・講師 玉森陽郷

水口支部・講師 竹寄吼郷 木下酔郷

榛原教室・講師 子守鷺秀

高槻教室・講師 津崎竹郷

大正教室・講師 玉森陽郷

長岡教室・講師 宮沢草郷

育和教室・講師 馬屋原芳郷

※大橋鷺迅先生曰く・・・

鷺郷門下には、恩師佐々木鷺郷先生が残された洋音の会歌（鷺郷吟詩会歌）があります。

おそらく吟界では後にも先にも鷺郷門下くらいではないかと自負しています。

記 佐川 駿声

淞苑会桜井道場・水曜文殊教室

平成30年11月14日（水）近鉄大阪線桜井駅下車し、中谷淞苑先生の桜井道場をご訪問させていただきました。今から20年前に（故）北井鷺淞先生の守目堂支部から独立して桜井支部を開設されました。そのときの看板がそのまま歴史を物語ります。ご自宅の母屋に面して建築された稽古場は、現在では桜井道場として「淞苑会」の本部が置かれています。



14教室のうち3教室を近鉄文化サロン、5教室をこの桜井道場で中谷先生が直接指導され、後の6教室はお弟子さんに別の場所で指導を任されています。

今回は、桜井道場の水曜日「文殊教室」（14時～16時）のお稽古風景取材させていただきました。「淞苑会」さんはこの度、創立20周年記念吟詠大会・祝賀会を開催される運びとなり、舞台での吟詠のお稽古もされるため、この度、他の教室の生徒さんも集合されました。

まず、互礼をされた後、簡単な体操（首や肩のストレッチ）からスタートです。

本日は、新体詩「肩を揉む」（税所敦子）を素読した後、意解を全員で読み上げ、作者略伝が解説され、中谷先生の模範朗詠を譜面を見ながら確認、男女に分かれて合吟しました。

皆さん、やれやれという溜息（苦笑）とにかく新体詩は何回も何回も繰り返しやらないとムズカシイですねー！ということで、このくらいにして、次は、20周年大会での会員吟詠の練習です。吟歴ごとに4ブロックに分かれて合吟します。その都度、中谷先生からもっと気合いを入れて！と檄が飛びます（苦笑）厳しくも楽しいお稽古もこの辺で終わりにして、今回



はこれから座談会をしますと中谷先生が申され、取材の小生にも入ってくださいとのこと。お菓子とお茶が出され、なんとまあ気を遣ってください、小生と中谷先生は缶ビール(＾0＾;)みんなでカンパイ（笑）

どうしたら会員さんをこれから増やしていけるか、ボイストレーニング（発声練習）はどんな方法があるか云々、いろんな話題に花が咲きました。

それにしても、皆さんは羨ましい。本部教養指導部副部長である中谷先生の正確でしっかりとした吟詠指導をいつも受けることが出来る。これからも楽しく和やかに詩吟を広めていってください。

最後に記念撮影です。どうもありがとうございました。



記 塩路 澄誠



白さぎ地方の話題コーナー

公認 岳豊会 日高支部吟行会 岡山『作楽神社』を訪ねて

日高支部 事業部長 宮下岳恭

日高支部吟行会は14回を数えるまでになりました。

時期を迎え、さてさてと行き先を考えている頃、白鷺連合会発行の冊子『白さぎ』が届き史跡探訪の旅の記事が目飛び込んできた。『児島高德の忠誠心を祀る作楽神社を訪ねて、内心ああここに決まり!!』と思いながら、指導者の教室の時に案として打診、殆どの先生方の了解を得ることが出来、岡山方面へと決まった。日程も5月27日(日)と決まり、今度は天気が気になるところでしたが、当日は好天に恵まれ汗ばむ位の初夏の一日となった。42名の参加となり日高振興局を8:15出発。車窓からは新緑が目にしみる自然の中一路岡山へと走ります。車中は早々に松尾岳豊講師による『児島高德』の吟指導「天莫空勾踐／時非無范蠡」の「2行十字」の丁寧な説明をいただきました。

そうこうしている間にいよいよ目的地である津山市〆院庄 作楽神社、に到着、敷地は全体が国指定史跡となっており、足を踏み入れた途端に厳かな雰囲気。まずはみんなお参りをして、車中で指導を頂いた『斉藤監物作 児島高德』を本殿前において奉納吟。境内いっばいに響き渡りました。

後醍醐天皇が隠岐島へ流刑される途中立ち寄られた宿まで助けようと駆け付けたが叶わず中国の古事に因んで『二行十字』の詩を桜の幹に刻んだ。その桜の木に似せた石の大木に今も残されている。漢詩『児島高德』の詩をより深く理解することが出来た。

この作楽神社 春は桜、初夏はカキツバタ、スイレンの池はカメラに収めるとまるでモネのスイレンの池、の様でした。昼食場所の鶴山ホテルでは、岡山寿司の定食でゆっくりとご馳走を頂きました。その後、城東町並み保存地区を自由散策、健脚の男性は津山城跡まで登った人もあった。

帰路はまたビンゴゲームとカラオケで楽しくみんな元気に帰って来ました。



機関紙のコーナー（ご紹介）

鷺照吟詠会会報

公認 鷺照吟詠会
 広報理事 木南春樹（駿照）

「会報」のルーツを辿りますと、昭和30年今は亡き佐藤鷺照先生が岡山の地に吟詠教室を開設、昭和32年には岡山支部、昭和43年には鷺照会と組織、名称変更がなされましたが、機関紙としては昭和47年8月15日に「鷺照会会報」の創刊号を発行しています。佐藤鷺照先生没後、平成12年「鷺照会」を発展的に解散し、後継会としての「鷺照吟詠会」が発足したため、会報名も「鷺照吟詠会会報」とし、平成14年からは1年に1回（4月）発行している、長い伝統ある歴史的な会報と考えております。

私達の会報の目的は主に2点です。1点目は会の基本方針や運営状況を会員の皆様にお伝えすること、2点目は会員相互の情報交換の場という役割です。具体的には大取会長の年度方針をはじめ会の年間行事計画、白鷺連合会や総本部の各種行事に参加した報告や感想、また各種競吟大会での優勝者喜びの声など、過去1年間の行事を振り返ることや各支部・各教室の紹介など幅広く取り上げています。

現在が一番の課題は、内容がマンネリ化して

おり、今一つ新鮮味に欠けるということです。課題解決の取り組みとして、今までは発行直前に一括でお願いしていた原稿を、各種行事に参加した感想や競吟大会優勝者喜びの声など、行事終了後にその都度、記憶と感動が新鮮なタイミングでお願いすることとしました。更に、紙面に新鮮味を吹き込むため、詩吟以外の趣味、例えば俳句・川柳・写真・旅行・切り絵・絵手紙などの自由投稿を幅広く呼び掛けています。結果として今春発行号（第17号）では、会員から『トワイライトエクスプレス「瑞風」の旅』と題する旅行記や、風情のある『絵手紙』をお寄せ頂くことができました。まだまだ取組は始まったばかりですが、会員の皆様のご協力を得て、徐々に紙面が充実し始めたところです。詩吟の会報という基本は大切にしつつ、新鮮味も加味しながら皆様のお知恵を頂き、また他会・他支部の会報も大いに参考にさせて頂きながら、一層の充実を図って参ります。今後とも鷺照吟詠会をよろしくお願い致します。



史跡探訪の旅



藤樹書院を訪ねて……

「近江に聖人あり」

日本陽明学の故郷 藤樹書院を訪ねました

新教本その3の85ページ「過藤樹書院」の詳しい鑑賞文と参考文にふれ、5月3日、大阪からJR湖西線に乗り、滋賀県高島市にある藤樹書院を訪ねました。

私は滋賀県人ですが恥ずかしいことに、中江藤樹先生のお名前すら知りませんでした。この詩の起句「江西の書院」に心が止まり、自分の目で確かめたいと想い福永洋恵部員と出かけました。

比叡山と琵琶湖を両手に愛でながら、1時間20分の湖西の旅。安曇川駅では銅像の藤樹先生に迎えられました。



目的の藤樹書院や藤樹記念館あたりまでは徒歩20分ほどの距離でしたが、街路地の藤棚やイチハツの花が、ほんとに綺麗に整備されていて、その景色が目にはごちそうで楽しく歩けました。

その街路地を「よえもんさん通り」と名付けられている事を不思議に思いながら歩いて行くと、記念館の手前に、中国風の建物「陽明園」が、また不思議な雰囲気です。静まりかえり、中をうかがうと一瞬中国かと、錯覚する空間でした。

その建物は陽明学の王陽明先生、生誕の地から、日本陽明学の祖・中江藤樹先生、生誕の地、ここ安曇川市との日中友好シンボルです。建設されたのが、藤樹先生没後344年、なんと平

成4年の事でした。想いは今も脈々と受け継がれ、教えを請うている力強さを感じました。オープンな庭園でした。

「陽明園」に隣接する記念館では職員さんから説明を受けましたが、その話しぶりは、実際にその時代を共に生きておられたかと、思うくらい、細かく丁寧なお話でした。藤樹先生を今も慈しんでおられることが、ヒシヒシと感じました。

藤樹先生の教えの基本は「親を愛し、敬うこと＝愛敬」です。村人や門人に説かれた教えの逸話がわかりやすく絵で描かれ、また数々の遺品や書物も飽きる事無く、見入ってしまい、何度も心の中で感動し拍手していました。

私は優しく思いやりの心を慈しんでいくことの、教えと感じました。この心を忘れないようにしたいものです。

その中で私の心に響いたことは、この町の方々、今も藤樹先生の教えを、自然に当たり前、守り続けて実践されていることです。

その一つに地元の小学校では毎年3年生になると、将来の夢を作文に書き上げ、藤樹神社に参拝し、奉納されます。

これを「立志祭(りっしさい)」と言い、藤樹先生の誕生日3月7日に行われています。そして10年後の成人式に奉納された自分の作文を受け取り、自分の夢と再会する。なんて素晴らしい心の里帰り。

9歳の自分を思い出し、夢抱いていた元気な心にふと振り返り、幼き自分に励まされる方も多いことでしょうね。今も3つの小学校で行われています。

3年生つまり9歳は藤樹先生が親元を離れ、祖父様と米子に移られた歳で、先生が農民から武士への、努力の始まりの歳です。尋常でない努力をされた先生は、代官職をも捨て、脱藩までしても母の介護の為に、帰郷されたのが27歳(1634年)でした。

今も続く書院の数々の年中行事は、1年を通して4つの大きな行事があります。

毎回「愛敬」という文字を掲げ仰ぎ見、「孝経」とされている文を、参加者全員で唱和されます。

孝経とは両親から頂いた心身を大切に、傷つけず自他の命を大切に、父母、祖父母を尊敬し、祖先を大切に祭り、季節に応じて栽培を工夫し、資源を節約し、勤勉で謙虚に、人々を愛し、睦まじく生活することが、孝の実践である

私は藤澤黄坡先生の巻頭言と、同じように思いました。素晴らしい言葉は口に、声にすることにより、心に染み渡ってくると思いました。

孝経のお言葉は、今の時代の私達にも理解でき、うなずけます、そしてこうありたいと思いつつながら、これからも語り続けられることを祈りました。

毎年の役方は、紋付き袴に袴の正式装束で、重々しく今も変わりなく、執り行われていると聞きました。

また駅前で不思議と感じた「よえもん」は藤樹先生の通称でした。本名は原（げん）、藤樹という名は、先生宅の庭にあった藤の樹が、生い茂っていたことから「藤樹先生」という愛称が生まれたそうです。

今もその藤の樹の子孫は力強く書院の裏手に息づいています。



駅前から沢山の藤の樹が書院を案内するかのよう、大切にされている意味がわかったように思いました。

藤樹神社から、書院までの途中に先生のお墓がありました。墓所は玉林寺の山門前に、こんもりと盛られたお墓で、今まで目にしたことのない形地で「儒葬墓」という説明でした。そして愈々 藤樹書院です

目的の書院は木造で、以前の家を再現された建物でした。

当時の書院は、明治13年に起きた村の大半を焼き尽くす大火で、焼失したそうです。先生の大切な書物や品々は、村人たちの手で、運び

出されました。自宅より先生の書院が大事と駆けつけた村人たちの行動に、また感動しました。



先生は米子から移られた大洲での武士を捨て、この地に帰郷されるも、大洲から教えを請う武士に門を開かれ、村人達にも私塾を開放された。村人達の行動が物語っていますね。

惜しくも僅か14年の私塾でしたが、中身の濃い教えは今も息づいています。



書院の内部も以前の姿に復元され、先生のおしえの言葉などが数多く展示されていました。その中央に先生の位牌が、ご母堂様 ご子息に囲まれて、祀られていました。

その位牌に供えられた綺麗なお生花に目がとまり、尋ねると毎日その季節の生花を、誰かれともなく持参し、お花を絶やすことがないと聞



き、心打たれました。

書院で説明くださった方もボランティアで町会長さんでした。もちろん雄弁で楽しくお話くださいました。

同じ敷地内には「良知館」と名の休憩施設がありました。藤樹先生の教えの「致良知」の言葉を優しく説いて説明されている施設でした。

良い心はいつも振り返り、また復唱することが大切と説明されていました。

やはり、復唱は大切ですね

藤樹先生の9歳の銅像が青柳小学校にあると聞き訪ねました。そうです3年生の立志祭を続けている小学校のひとつです。整理整頓された校庭に凜々しいお姿でおられました。



ゆっくりと進んでいたひと昔を振り返り、自分の足下を見つめ、考える事を思い出させてくれた今回の史跡探訪は、心がいっぱい満たされ滋賀県人として誇りに思い、心の杖を頂いた旅になりました。

2018 5/3 記 天田澄慈
広報部員 福永洋恵

藤澤黄坡先生と泊園文庫を訪ねて

私は関西吟詩会歌や巻頭言を唱和する毎に、藤澤黄坡先生はどのような先生なのかしらと、気になりこの度思い切って訪ねました。



(藤澤黄坡先生)

関西大学の文学科教授で二代目会長宮崎東明先生の漢詩の先生でした。出来た漢詩を詠ってみたいと東明先生が提案され、関西吟詩が生まれたようです。

そこで我が関西吟詩の初代会長の藤澤黄坡先生の人となり調べたくなり、本日の訪問になりました。

今回この関西大学の卒業生で、現在関西大学吟詩部の講師をされています齋藤鷺鉄先生のお口添えて、長谷部剛教授から直々に説明を聞かせて頂く事が出来ました。ご多忙の中、長谷部先生は快く時間を割いて頂き、貴重なお話を伺う事が出来ました。

黄坡先生は明治9年大阪で生まれ、幼少より父南岳に漢学を学び、大正11年(1922)に関西大学の予科講師として就任、昭和4年に教授となられ、13年定年退職された後も教鞭を執られました。

昭和23年初代名誉教授の称号を与えられるも、その年の12月13日に没。72歳でした。

藤澤黄坡先生は難しい漢文の講義を、独特なさびのある声、枯れた渋い声で、その上、大阪弁でわかりやすく説かれ、上方落語を模した語調で講義されたようです。「眠っていたらあきまへんでえ……」と、老荘の難しい書なども、わかりやすく説かれ、「上方落語を聞かせて頂いているようで、途端に漢文が好きになった」という逸話もあるほど、楽しい授業だったようです。

時には黒紋付き袴で出講され、学生からは講義の為に落語を研究している説もあがるほど、寄席がお好きだったようです。

人情篤く、よく他人の世話をされ、お酒も好み、また蘭の花が好きで栽培もされていたようです。

書も達筆で頼まれると揮毫も気軽に引き受けられ、厳しい中に気さくな先生。

また漢詩の創作に熱心で、講義の合間も学舎を散策され、その僅かな間に二、三首作詩されたと言われていました。

昭和9年に藤澤先生は詩吟の会、関西吟詩同好会と、その会歌を作られ、会長になられた。昭和48年に文化庁の認可を受け「社団法人関西吟詩文化協会」と改組、平成24年には現在の「公益社団法人関西吟詩文化協会」となりました。

関西吟詩は関西大学が「源」、今も歴史を刻む関西大学の吟詩部は力強く活動されています。「泊園文庫」を語らずして、藤澤黄坡先生を知ることが出来ないと思いました。

そして 愈々、目的の泊園文庫との対面です。大学の心臓ともいえる書物の宝庫「関西大学総合図書館」に、長谷部先生の引率で叶った「泊園文庫」との対面、心が騒ぎました。



(関西大学総合図書館・泊園文庫書架) 冊子より

大阪のみならず日本文学の原石ともいえる「泊園書院」の文庫は、想像していた書庫ではなく、つまり一般に解放された本棚ではありませんでした。図書館ですが厳重に管理された関西大学のみならず日本文学の貴重な宝庫でした。

入館するに各々の私物を預け名札を付け、長谷部先生の付き添いとして入館できました。

整理整頓された数え切れない書物の中に「泊園文庫」はありました。

「泊園書院」は祖父初代東咳 父二代南岳 兄三代黄鵠 そして四代黄坡先生の人生のすべてと想いました。その書物を手にすることは出来ませんでした。大切に「江戸・明治・大正・昭和と日本文学の歩みを辿る 泊園文庫」は保

管されていました。その近くにこの春訪ねた湖西の「中江藤樹書」を見つけ、同じく貴重書物として保管されていて、少し嬉しかったです。

「泊園」というのは先生の祖父、初代東咳の号でした。そしてその意味は「さっぱりとした静かな心持ちで学問する学び舎」という意味がありました。

「泊園書院」は四代黄坡先生で閉院。遺された書院は戦火で焼失。その跡地に黄坡先生のご長男小説家藤澤桓夫氏により、「泊園書院址」の記念碑が建立され、平成22年の秋に、関西大学の以文館北側に移置。泊園の伝統を今に伝えています。桓夫氏により昭和26年に蔵書などは一括寄贈されたようです。

「泊園書院」出身の門人は政界・官界・実業家・教育者・ジャーナリズム・学術・文芸などさまざまな分野で活躍され、魅力的な方々がおられました。田辺聖子先生もそのお一人と聞き、親しみを感じました。

泊園書院の優れた伝統を現在も継承、発展させようという趣旨のもとに、昭和36年に大学内に泊園記念会は設立されました。現在も市民講座として毎年開催され、雑誌「泊園」も刊行されていると聞きました。

藤澤家の菩提寺は大阪天王寺区生玉町の曹洞宗の寺院「齢延寺」。先生の墓標の背面には漢詩がぎっしり、その中に「泊園」の文字もはっきりと。静かに手を合わせました。



菩提寺 齢延寺にて

この度の訪問は関西大学の長谷部剛教授のご厚情と、齋藤鷺鉄先生のご尽力のおかげです。感謝申し上げます。ありがとうございました。

2018 10/11 記 天田澄慈

大寅蒲鉾工場見学とぶどう狩り日帰りの旅

女性部長 加藤 扇 郊

二週間前の台風の襲来で関西各地に大きな被害が出て、とても心配いたしました女性部社会見学「大寅蒲鉾工場見学とぶどう狩り日帰りの旅」を9月18日（火）に実施致しました。当日は絶好の行楽日和に恵まれ、集合場所の新大阪に皆さん元気いっぱい、にこやかに定刻の8時30分集合2台のバス96名の参加で出発しました。新御堂筋、近畿道・西名阪道で藤井寺ICから大寅蒲鉾工場へ向かいました。車中では白鷺女性部の絆を深めようと、自己紹介を行い、明るい笑顔と話し声でとても華やかにアツという間に蒲鉾工場へ到着しました。

玄関には蒲の穂が植えられ、ビデオにて蒲鉾作りの工程を見ました。蒲鉾の最初に形は、今のちくわ型だったそうで、鉾の先に魚のすり身を付けて焼いたのが始まりという伝説があり、この形が植物の蒲の穂に似ていて、蒲の穂は鉾のような形だったことから「がまのほこ」→「かまほこ」と呼ばれるようになったそうです。それで玄関に蒲の穂が植えられていたのが解りました。

平安時代の様子を描いた本の中で、西暦1115年のことだから、11月15日を「蒲鉾の日」としているそうです。試食用にいろいろな製品を十分に提供していただき、思い思いに各自お土産も購入して作業工程の工場見学を経て、昼食場所である「かんぼの宿」へ向かいました。

途中で車窓からは、田園風景の中に真っ赤な彼岸花があちこちに咲き、秋の訪れを感じ、だんだんと山の上へ進むにつれて眼下に広がる景色に感動しながら、30分あまりで「かんぼの宿」に到着致しました。まず玄関前で号車別に記念撮影をして昼食会場へ入りました。常任相談役矢野陽吼先生のご挨拶を頂き、高田朱粹先生の乾杯で和やかなうちに昼食となりました。

午後からは、待望のぶどう狩り、食後のデザート宜しく、たわわに実ったぶどう園で自分の好きな房（ふさ）を選び、心ゆくまで秋の味覚を堪能致しました。途中、道の駅しらとりの郷で休憩を取り、新大阪までの車中では、恒例のビンゴゲームを楽しみながら、予定より少し遅くなりましたが無事新大阪へと帰って参りました。お陰様で何の事故もなく、元気に充実した社会見学を終えることができ、感謝いたしております。ありがとうございました



第51回白鷺連合会青年部吟詠大会を終えて

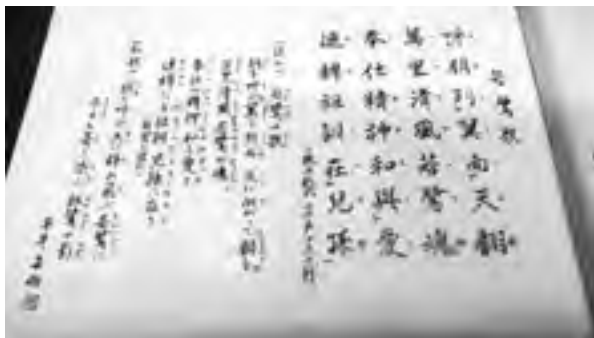
青年部部长 中 岡 蒼狼声

秋も深まり少々肌寒い季節となってきた11月25日、大阪市の此花区民ホールにて「第51回白鷺連合会青年部吟詠大会「RISING SUN」～陽はまた昇る～」を開催しました。

「第50回記念大会」という一大行事を終え、達成した充実感、そしてやり切った脱力感が身体から抜けきれない中、ようやく辿り着いた「第51回大会」でもありました。

まずは、「開会の辞」。務めますは青年部最若手の成秋会の藤山亜莉沙さん。続く、「関西吟詩文化協会会歌合吟」。先導を務めますは続きましての若手、攝友会の和田彩仁さん。女性陣が続いた後、男性の出番。「巻頭言」発声は次なる若手の同じく攝友会の堂貴攝さん。若さ感じるオープニングで幕を開けました。

その後、前回大会で岳豊会の平井岳雨先生に作成いただいた青年部部詩「若鷺の詩」を青年部全員で合吟を行いました。



午後からは恒例となりました「飛び入り吟詠」のコーナーに前会長の松尾佳恵先生、ご来賓である哲菖会の中島菖豊先生をお招きし、吟歴の浅い新人の方へワンポイントアドバイスを行っていただきました。

本年度青年部大会のトリは石本忱武副部長の監督・脚本による構成吟「幕末の志士」。

今回は遠方の広島鷺夕会から参加の木村夕夏さん、高村夕熙さん、三上夕柏さんも含め、吟に和歌、ナレーション交え青年部全員が出番を設け、取り組みました。若手から経験を積んだ部員まで全員が相まみえた今年の大会に相応しい構成吟となりました。



とは言いましてもそこは青年部大会のこと。恙なく大団円を迎えたということでもなく、やはりミスはありました。ですが、それに対し周りの部員がフォロー、ケアを自然に行っていることを目の当たりにし、改めて青年部の「団結」する力というものを実感しました。

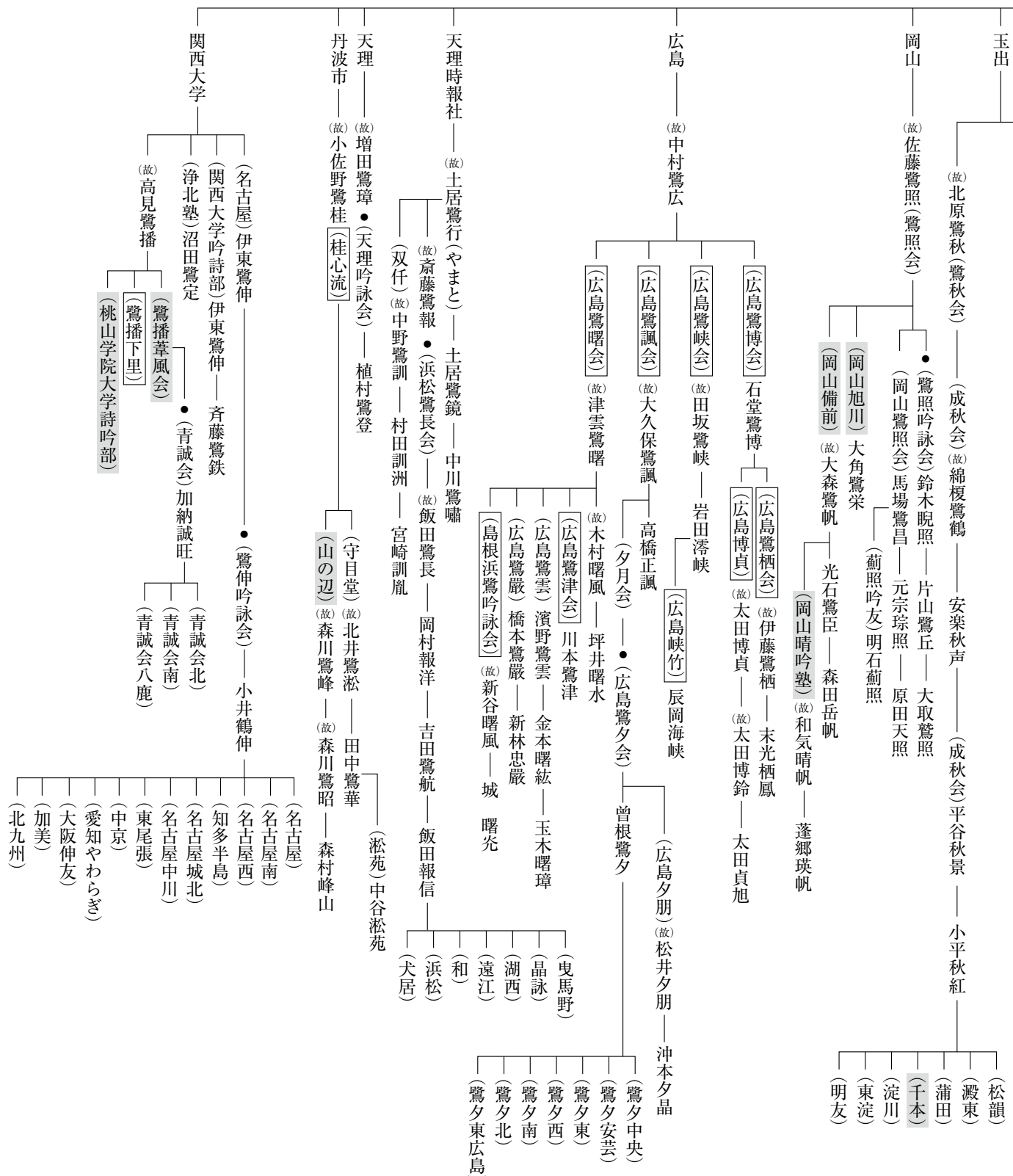


最後になりましたが、お忙しいところ当日ご臨席賜りました友好青年部ご来賓の皆様、関西吟詩文化協会ご来賓の皆様、また、白鷺連合会の諸先生方、各会会員の皆様、そして当日お手伝い戴いた青年部の先輩方々、諸先生方、すべての皆様から心から青年部一同御礼申し上げます。

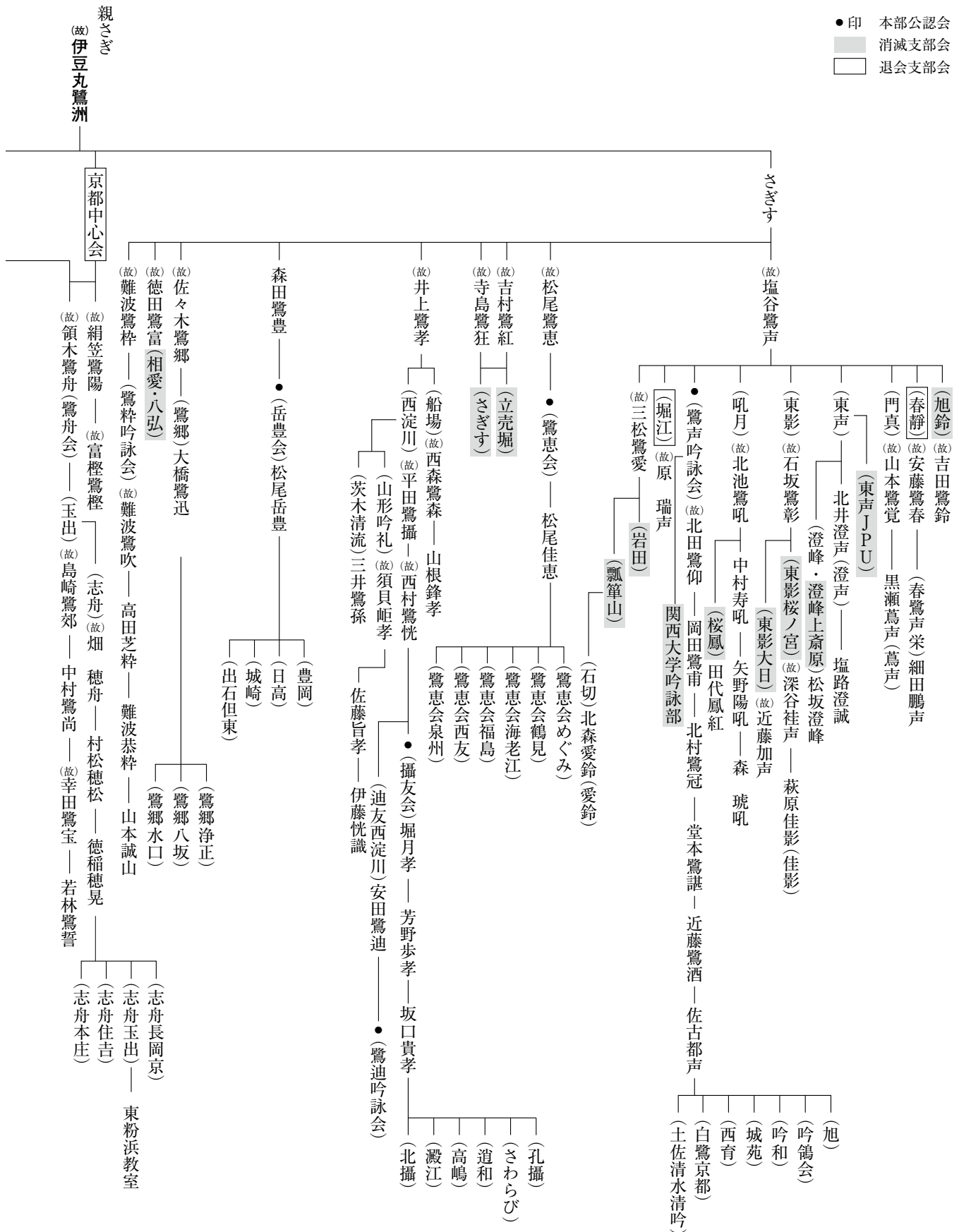
引き続き、青年部へのご指導ご鞭撻の程、宜しくお願い致します。

白鷺連合会組織系統一覽

(平成 30 年 12 月現在)



●印 本部公認会
 ■ 消滅支部会
 □ 退会支部会



<広報部>



長谷川岩郷 塩路澄誠部長 岳野恍輔 佐川駿声副部長
福永洋恵 天田澄慈 津曲恍嫺 表西鵬吼

編集後記

- ★平成30年5月に開催された白鷺理事総会の役員改選において、広報部長（HP管理部長兼務）として留任することになり2期目を迎えた小生ですが、広報部員も引き続き欠けることなく2期目に入りました。広報としての新しい感覚、アンテナをますます張りながら、情報発信して参るべく結束を新たにしましたところ です。
- ★今期は、白鷺連合会も西村夕城新会長による新体制がスタートいたしました。平成という元号は4月30日をもって幕を閉じ、2019年5月1日から新元号になります。

- ★新しい船出を寿ぎながら、わが白鷺連合会も白鷺創立60周年を迎える4年後までの準備期間として、新元号になってからの「白さぎ交流会」「白さぎ吟行会大阪大会」というメイン企画行事を成功させましょう。
- ★気持ち新たに新しい会員仲間を増やして、白鷺は「和と奉仕の精神」で絆を固く結び、吟詠界の発展のため心機一転、起死回生の活動を邁進していくエネルギーの宝庫でありたいと思います。

広報部長・塩路澄誠

行 事 予 定

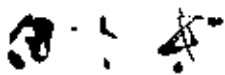
(2019年4月～2020年3月)

2019年4月～12月

月	日	行 事 予 定
4	7	第57回白さぎ吟詠の集い競吟大会
5	11	白鷺連合会理事総会
6	1	関吟定時総会
6	9	特別研修会兼推薦師範講習会
6	16	関吟吟詠普及研修会（九州）
6	16	関吟昇格試験（地方）
7	21	関吟昇格試験（師範・準師範）
7	28	関吟昇格試験（師範代）
8	18	関吟吟詠普及研修会（岡山）
9	1	関吟本部研修会（師範 課題詩）
9	8	関吟東明碑前祭・本部研修会
10	19	関吟全国師範大会（大東サーティホール）
10	26/27	白さぎ吟行会 大阪大会 in大津
11	3	白鷺青年部大会（場所未定）
11	10	関吟全国新人中間層吟詠大会
11	23	白鷺女性部大会
11	24	関吟本部研修会（準師範・師範代課題詩）
12	8	関吟全国師範代・準師範・師範吟士権大会

2020年1月～3月

1	11	白鷺連合会新年互礼会
1	12	関吟新春吟詠普及大会（新年互礼会）
2	1～2	関吟吟道大学講座
2	9	関吟吟詠普及研修会（京滋・福井）
2	16	関吟吟詠普及研修会（東海・愛知・三重）
2	23	関吟吟詠普及研修会（四国）
3	15	関吟吟詠普及研修会（西中国）
3	22	関吟青年部大会



No.50

発行 2019年1月25日
発行所 公益財団法人関西吟詩文化協会承認白鷺連合会
発行責任者 西村夕城
編集責任者 塩路澄誠

題字／西野楊郷